

Q³ Kyushu University Advanced Asian Archaeological Research Center R^C NEWSLETTER No. 15 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター

2018. Mar.



過去の植物利用と人為植生の復元を目指して

発掘調査社会連携部門
比較社会文化研究院 藤岡 悠一郎

野生植物の採集は、人類の最も古い生業の一種である。野生植物由来の澱粉利用は、約1.5万年前から世界各地で生み出された農業や牧畜などの新しい生業の陰に隠れながらも、現代まで連綿と続けられている。日本では、コナラ属樹木の種子であるドングリ類やトチノミ、クルミ、ユリ根、野イチゴなど、多種多様な植物が古代から澱粉源として利用されてきた。人間による植物の利用は、意図的／非意図的な植生の改変をともなう場合が多く、また、人間が植物の生育過程に強く介入し続けてきた植物種においては、遺伝的な変異をともなうドメスティケーションが進行した。採集活動や人為による植生改変は、原植生のタイプや他生業との組み合わせなどのローカルな条件により、地域差や時代による大きな変化が認められる。私は、このような植物利用を通じた人間と植生との相互的な変化や地域的な差異に興味を持ち、研究を進めている。

過去の植物利用の復元は、植物遺体が腐食や分解によって比較的残存しにくいという性質があるため、試料や情報の制約のなかで研究が進められてきた。考古学の研究では、貝塚や貯蔵穴などから出土した種子や種皮などの植物遺体、土器に付着した澱粉などを手掛かりに、過去の野生植物利用の復元が行われている。他方、私が専門とする地理学や生態人類学の分野では、現代の山村における聞き取りや植生調査、参与観察などの手法から、現在や過去数十年程度の植物利用に関する知見が蓄積されてきた。現代における植物利用の方法や採集行動、技術に関する知見は、過去の植物利用復

元の手掛かりとして考古学においても古くから注目されてきた。私の研究では、このような民族考古学的なアプローチとともに、花粉分析や現生植生の樹種構成などの自然地理学の手法を合わせ、植生環境の変遷と植物利用との関係性を明らかにしたいと考えている。

現在、日本に立地する一部の山村では、採集の場として利用されてきた特異な人為植生が分布している。例えば、私が共同研究を実施している滋賀県高島市や山形県鶴岡市に位置する山村では、集落近くの山林の一角にトチノキの巨木が林立する巨木林が成立していることが明らかとなった。トチノキは、日本の溪畔林に広く自生する落葉広葉樹で、秋口に直径4cmほどの黒光りする大きな実をつける。その種子は山村



写真1 滋賀県高島市のトチノキ巨木林

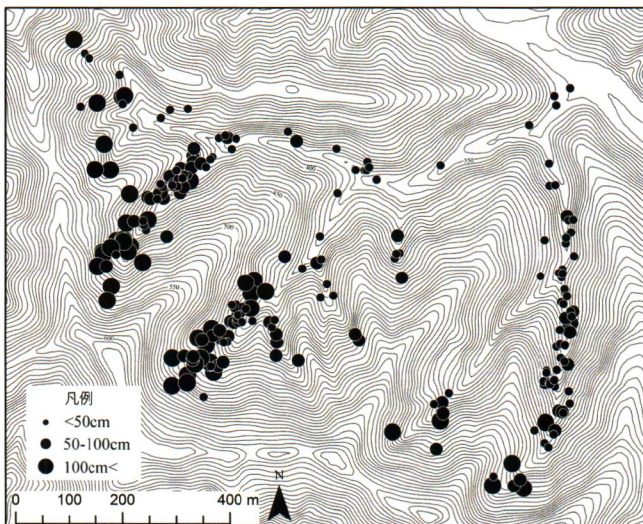


図 滋賀県高島市における山林谷頭部のトチノキの分布。
凡例はトチノキの胸高直径を示す。

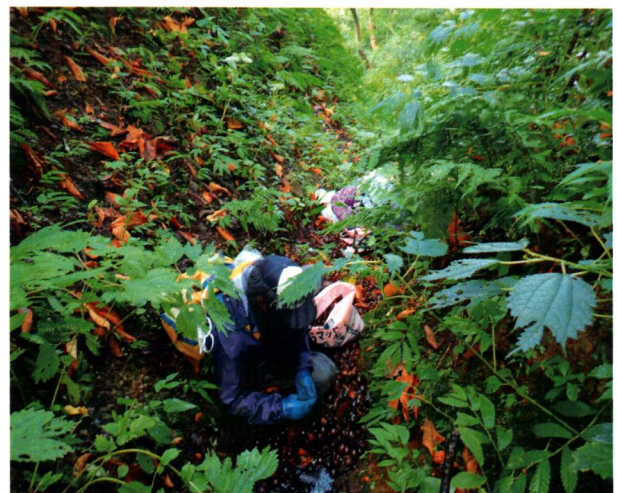


写真2 山形県鶴岡市でのトチノミ採集

に暮らす人々の澱粉源として利用されてきた。このような植

生は、地域の住民が炭焼きや刈敷採集を行ってきた里山や集落で保護してきた共有林などとして、人間の営為を強く受ける形で成立していた。トチノミは全国の遺跡からも出土が認められ、縄文時代から人々によって利用されてきたことが知られている。今後は様々な分野の研究者の方々と共同研究を進め、当時の採集の状況や採集の場となった植生形態の復元を目指していきたい。



写真3 採集したトチノミの分配



台湾・中央研究院訪問記

文化財調査法開発部門
比較社会文化研究院 舟橋 京子

先のニュースレター (No14, 2017 Dec.) においてご紹介した、台湾の中央研究院歴史語言研究所と当センター間の学術交流協定 (2017年10月10日発効) に基づき、2018年1月22日—24日に、当センターの溝口孝司・田尻義了・舟橋京子が中央研究院歴史語言研究所を訪問した。訪問に際しては、ワークショップ及び収蔵資料の視察・共同研究に向けてのミーティングが行われた。

ワークショップに先立って、歴史語言研究所・所長の王明珂氏、同研究所考古学部門主任の李国悌氏、同副研究員の内田純子氏を交え、今後の研究方針・体制について確認を行った。

ワークショップにおいては、溝口・田尻・舟橋がそれぞれ、当センターにおいて行われている特色のある分析手法を用いた研究事例について発表を行った。発表はそれぞれ

「Re-analyzing His-Pei-Kang Late Shang royal tombs of Anyang: a report on collaborative research in progress with Dr. Junko Uchida」(溝口孝司)、「九州大学における古人骨を用いた学融合研究-金井東裏遺跡事例-」(舟橋京子)、「土器胎土分析の研究事例-福岡県出土須恵器-」(田尻義了)



写真1 王所長を交えての今後の研究についての打ち合わせ

というタイトルで行われた。最新の編年研究に基づく殷墟墓地の墓地分析に基づく社会考古学的研究成果、群馬県金井東裏遺跡を対象とした、考古学・形質人類学・地球科学による学融合研究成果、福岡県船原古墳出土須恵器の高精度胎土分析に基づく研究成果について発表が行われた。

発表後にはフロアから活発に質問が行われ、センターにおける学融合研究への高い興味が示された。ワークショップ後には食事会も開かれ、ワークショップに参加した研究所のメンバーから様々な質問が飛ぶとともに、多様な意見交換の場となった。

その後、研究所地下の収蔵庫に場所を移し、今後共同研究を進める予定の遺跡から出土した古人骨や玉器・金属器などの資料状況を確認した。さらに、内田氏、精華大学教員の邱鴻霖氏を交え、今後の具体的な研究方法・研究方針についての活発な意見交換が行われた。

今回のミーティングを基に、次年度には再び台湾中央研究院を訪れて、実際のデータの収集および分析作業が開始される予定である。是非、成果をご期待いただきたい。



写真2 歴史語言研究所でのワークショップ

【センター活動報告】

平成29年12月13日

地球社会統合科学府 統合的学際教育の実践に向けて 第3回FD
「学際融合研究の実践-アジア埋蔵文化財研究センターの挑戦」
発表者: 仙田量子・田尻義了・舟橋京子・足立達朗

平成30年1月23日

第4回アジア埋蔵文化財研究センターワークショップ
講演題目・講演者は、上欄の記事に記載

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター No. 15

発行: 〒819-0395 福岡市西区元岡744
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
編集: 仙田量子 発行日: 2018年3月30日
TEL: 092-802-5653/FAX: 092-802-5662
E-mail: qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp
ホームページ <http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/>